戦後の在日朝鮮人女性の識字教育と自己表現
——在日朝鮮人民族団体に着目して

朴 成柱

キーワード：在日朝鮮人女性、識字教育、自己表現、民族団体、記憶

1. はじめに

植民地支配からの解放後も、朝鮮半島の不安定な情勢などで、故郷に帰れなかった在日朝鮮人は民族差別が根強い日本社会で生き残るため、民族組織を中心としたコミュニティへの結集を強めてきた。植民地主義の暴力が再生産される日本社会との戦いと、共同体への結束が一次的な課題として挙げられるなか、在日朝鮮人社会は民族の言語や文化、伝統などを守り抜くことによって、民族的アイデンティティーと自尊心を獲得していった[1]。

このように、在日朝鮮人が日本社会からの差別を打開していく一方、その内部には重層的な矛盾を抱え込まざるを得なかった。それは、在日朝鮮人社会の根強い家父長制に起因する女性差別である。しかし、在日朝鮮人社会では、女性たちを抑圧する内部の差別構造については無関心であり、日本社会の差別に対する闘いの蔭で、民族コミュニティ内の女性差別は副次的な問題として扱われてきた。それゆえ、在日朝鮮人女性たちは日本社会からの差別と民族コミュニティ内の女性差別という二重の差別に苦しまなければならなかった。

宋連玉（2005）は、在日朝鮮人社会における家父長制について、朝鮮半島の封建的ジェンダー規範と家族主義、それらの強化をさせた差別と貧困、その根源にある日本の植民地主義がそれぞれ密接につながっていると指摘し、「解放後の在日朝鮮人がおかれた社会的・経済的条件こそが性差別をさらに強める土壌となった」と述べている[2]。つまり、在日朝鮮人における家父長制の構成は、日本社会からの民族差別や植民地主義と緊密に関わっており、それによって、在日朝鮮人女性たちは人間としての権利が剥奪され、政治や経済、社会、文化、教育などのあらゆる分野から排除されることになる。彼女たちは、まさに二重の植民地化にさらされていたともいえよう。

近年では、在日朝鮮人女性文学をめぐる研究が進む中で、李良枝（1955–92）や柳美里（1968–）、鷺沢萠（1968–2004）以外の女性作家の作品も注目されるようになった。例えば、金壎我（2004）は「女性作家が男性作家と一世代の差を置いて出現するようになった」ことについて、「長い間朝鮮を支配していた儒教秩序が男尊女卑の思想」が強かったと指摘し[3]、1970年代から登場した宗秋月、李正子、李良枝、深沢夏衣、柳美里、金真須美を取り上げている。しかし、金の研究は女性たちの文学をこれまでの在日朝鮮人文学の「変種」として捉えて

1
李洪章『在日朝鮮人という民族経験——個人に立脚した共同性の再考へ』生活書院、2016年、41–44頁。

2
宋連玉「在日朝鮮人女性とは誰か」、岩崎稔・大川正彦・中野敏男・李孝徳編『継続する植民地主義——ジェンダー／民族／人種／階級』青弓社、2005年、262–263頁。

3
金壎我『在日朝鮮人女性文学論』作品社、2004年、18頁。

おり、女性たち自らが描くその表象や解放などを論じる上で不可欠なジェンダーの視点が取り入れられていないものである。

一方、磯貝治良(2006)は様々な女性作家や詩人たちを紹介し、そのうち1970年代から1980年代に登場した宗秋月、成律子、李良枝、金蒼生、元静美、庾妙達、李正子、香山末子を取り上げた。1970年代から、指紋押捺反対運動に見られるように、民族組織が主導した闘争から、個人の人権意識に目覚めた権利闘争へと展開したことを踏まえ、在日朝鮮人のより現実的な存在のあり方の希求が自己表現の意欲を促し、二世の女性作家・詩歌人が台頭したのではないかと指摘している[4]。これらの研究は、世界に対して語るべき言葉をもたない女性たちの声や、その当事者としての体験を作品のテーマとして創作活動を行ってきた女性作家に注目することで、女性解放への可能性を実現しようとする女性たちの姿を見出すことを試みたものといえるが、その際に取り組むべき課題として浮上したのは、一世の女性たちが「子供の視点」から分析されるにとどまり、常にものの言わぬ他者となっていることである。

この問題に異議を申し立てたのは、宋恵媛(2014a)である。宋恵媛は、戦後の日本国内の民族団体における女性解放や識字教育(朝鮮語)と連動しつつ、1945年から1970年代の25年間という時期を「日本語と朝鮮語の飛び交う脱植民地化の言語空間」[5]と想定し、女性たちの表現活動に注目した。そのため、世代論やこれまで日本語作品のみが注目されてきたこと、そして金達寿(1920–97)を在日朝鮮人文学の「嚆矢」として評価する従来の文学論を批判している[6]。これは、これまでの在日朝鮮人文学研究の中で当然視されてきた論点を真正面から問題提起したものといえるが、しかしそれから、宋恵媛は一世の女性たちの作文を在日朝鮮人文学史の「源流」として規定してしまう。こうした批判は、在日朝鮮人文学の始まりを金達寿から一世の女性たちの作文に置き換えるものだけで、彼女が指摘している「文学史」をまとめる方法論つまり、「選ぶ/選ばない」という仕組みはひっくり返した形で反復される恐れを内包している[7]。

さらに、女性作家として活動する女性たちが登場する以前の在日朝鮮人女性の多くは、読み書きに苦しみ、家事や育児に追われ、表現活動をすること自体が困難な状態に置かれていた[8]。加えて、非識字者であった女性たちが、何語(日本語/朝鮮語)を学んだのか、あるいは学ばざるをえなかったのかという問題も重要である。一世の女性たちにおける「書くこと」という問題は、在日朝鮮人女性文学自体のアイデンティティーを検討するうえで重要な論点となる。本稿の出発点は、まさにここにある。例えば、ここに一遍の作文がある。

> 題名:明るく澄んだ世界は夢のような世界　文オクチェ
>
> 明るく澄んだ世の中は夢のような世界です。私は成人学校で文字を習ったおかげで、明るく澄んだ世界を自分の目で見ることができるようになりました。教室に座って勉強をするたびに、私は過ぎ去った昔を思い出しました。(中略)

4
磯貝治良「〈在日〉文学の女性作家・詩歌人」、『架橋』26号、2006年、48–52頁。

5
宋恵媛『「在日朝鮮人文学史」のために——声なき声のポリフォニー』、岩波書店、2014年、11頁。

6
前掲、22–43頁。

7
磯貝治良(2015)もこれまで不可視化されてきた朝鮮語の作品に光を当てたことについては評価しつつも、「一九六〇年終わりまでのそれ[日本語の作品]を否定的にとらえる」ことには疑問を呈しており、また「「文学史」を探索/統合化する手法」についても、「わたしなりに心がけてきた「文学論」のそれと大きくは変わらない」と指摘している(磯貝治良「〈在日〉文学の二〇一五、そしてゆくえ——宋恵媛『「在日朝鮮人文学史」のために』にふれて」、『抗路』1号、2015年、135–141頁参照)。

8
徐阿貴『在日朝鮮人女性による「下位の対抗的な公共圏」の形成——大阪の夜間中学を核とした運動』御茶の水書房、2012年、11–12頁。

ある日、雪の上で洗濯をしていると、朝鮮の友達が訪ねてきました。その友達は「これは私たちの国だよ」と言って朝鮮地図を見せながら、ウリナラが日本の奴らに奪われなければ、今みたいに辱めを受けずに暮らすことができただろうと話しました。私はその話を聞いて、喉が詰まりました。私たち二人は抱き合いながら泣きました。その時、私は一一歳でした。

何銭にもならない日給を日本人の奴らにごまかされても、文字を知らないために一言も言えずに過ごしました。しかし、今は違います。文字を習うなんて、夢でしか考えられなかった私たちが、このように自由に文字を習うようになったとは、なんて良い世の中なのでしょうか。私が住んでいる地は昔と変わらない日本ですが、私たち朝鮮人の境遇は変わりました。私たちは、敬愛する首領を戴く、美しい自分の国の山河に自分の手でさらに美しい花を咲かせる、共和国の堂々たる公民です。元帥ニム、ありがとうございます。こざっぱりとした成人学校の教室に入るたびに、ぴかぴか光る机に座るたびに、私は私たちをこのように堂々と生きるようにして下さった金日成元帥に感謝します。(総連東京台東支部　車坂成人学校受講生)[9]

翻訳は宋恵媛によるものであり、下線と強調は論者による。

9
文オクチェ「明るく澄んだ世界は夢のような世界」、宋恵媛編『在日朝鮮女性作品集 一九四五～八四１』緑陰書房、2014年、14頁。初出は、『朝鮮新報』1964年12月5日、4面(朝鮮語)。

これは、文字を読み書きできることへの喜びを表現したものであり、朝鮮民主主義人民共和国(以下、「共和国」と略する)を支持する、民族組織の在日本朝鮮人総連合会(以下、「総連」と略する)が運営していた「車坂成人学校」の受講生が文字(朝鮮語)を学んで初めて作成したものである。「明るく澄んだ世界は夢のような世界」(『朝鮮新報』1964年12月5日、4面、朝鮮語)[10]という題目であり、在日朝鮮人女性の表現史として「文盲退治運動」の中で読み継がれているものである。

書き手の文オクチェは、日本社会の民族差別と、それに伴う貧困の中で学校に通うこともできず、文字を書くことも読むことすらもできなかった。高齢になってから、民族組織が運営している成人学校に通って文字を学び始めたのである。引用部分に見られるように、洗練された文章ではない。しかし、「明るく澄んだ世の中は夢のような世界です。私は成人学校で文字を習ったおかげで、明るく澄んだ世界を自分の目で見ることができるようになりました」という句は読者に、心を打たれるような感動を巻き起こすはずである。

また、印象的なのは「文オクチェ」という名前のみならず、彼女が所属している組織名も記されていることである。そのため、作文というよりもプロパガンダのような印象を与える。

この作文は、『在日朝鮮女性作品集 一九四五～八四１』(緑陰書房、2014)に収録されたものである。『在日朝鮮女性作品集 一九四五～八四』(全2巻)は、1945年から1984年までの間に、女性たちが日本語あるいは朝鮮語で書いたエッセイ、日記、手紙、作文、詩、小説を集成した初めての作品集であり、彼女らの文章から当時の女性たちの経験を読み取ることができる点で注目すべきである[11]。編者の宋恵媛(2014b)は、「イデオロギー色の強い文章であっても、

10
『朝鮮新報』(1961.1-)は、「総連」の機関紙であり、週に3回(月・水・金)ほど日本全国で発行されている。『朝鮮新報』は、『朝鮮民報』(1952.5-1961.1)が改称したものであり、その前身はまた『解放新聞』(1946.9-1950.8)となっている(李京珪「戦後日本の新聞雑誌メディアの在日朝鮮人関連資料」、『跨境:日本語文学研究』6号、2018年、220-222頁参照)。

11
識字教育と関連する章は、第1章の「文字の世界へ」であり、15編の作品が収録されている中、朝鮮語の作文が5編、詩が2編収録されている。

あえて排除」していないことについて、「異国で苦労しながらも逞しくひたむきに生きた女性たち、といった無色透明なイメージを再生産するだけでは、政治にまみれざるをえなかった当時の在日朝鮮女性たちの生のリアリティは浮かび上がらないと考えたからである」と述べている[12]。

そこで、本稿では、『在日朝鮮女性作品集 一九四五～八四 1・2』(緑陰書房、2014)に収録されている作品のうち、とくに朝鮮語で記されたものを取り上げ、戦後の在日朝鮮人女性たちの自己表現として、その「書くこと」の意味について検討する。それの作品は、在日本朝鮮人連盟(1945.10–1949.9)—在日朝鮮統一民主戦線(1951.1–1955)—在日本朝鮮人総連合会(1955–)系列の組織の影響下にあった民族団体で識字教育(朝鮮語[13])を受けた一世の女性たちの文章や作文である[14]。引用は、宋恵媛編『在日朝鮮女性作品集一九四五～八四 1・2』(緑陰書房、2014)から行い、初出の発行年を併記することにする。

女性たちは、植民地時代に奪われていた文字(朝鮮語)を獲得する識字教育から、自分の中で閉ざされていたものを発見することになった。その活動は「共和国」とその影響下にある民族団体から自由ではなかったという限界があったとはいえ、彼女たちは「書くこと」を通して世界と向き合うことになり、そこから様々な文章や作文、日記などが生まれた。また、日本社会における民族差別はいうまでもなく、「生家では父に従い、嫁しては夫に従い、老いては息子に従え」という封建的思想、植民地支配によって深刻化した貧困。何重もの苦難を抱え、彼女たちは生き抜いてきた。彼女たちの文章は時間が経つにつれて、その当事者が消えていく今日において、彼女たちの姿を模索する際に重要な端緒となるものだろう。

12
宋恵媛編『在日朝鮮女性作品集 一九四五～八四 1』、ⅳ頁。

13
朝鮮語の識字教育は、植民地支配からの「解放」を迎えた1945年から行われたのに対し、日本語の識字教育は制度的に整っておらず、女性たちが日本語を学ぶ機会を得たのは、そのずっと後の1960年以降のことであり、主に夜間中学で行われた(山根実紀著・山根実紀論文集編集委員会編『オモニがうたう竹田の子守唄——在日朝鮮人女性の学びとポスト植民地問題』インパクト出版会、2017年、33–34頁)。

14
大韓民国を支持する在日本大韓民国民団(以下、「民団」と略する)の機関紙であった『新朝鮮新聞』や『民主新聞』などの資料を発掘したものの、女性を対象とした識字教育などを行ったという具体的な記録がないため、「民団」系の女性たちの自己表現の跡をたどることはほとんどできない現状である。

2. 朝鮮語の識字教育とその意義

本節では、戦後の朝鮮語の識字教育がどのように行われていたのかについて見てみたい。

植民地支配からの解放を迎え、在日朝鮮人がその抑圧からいかにして自由になれるのかという答えを見出そうとするなか、「朝鮮民族の解放は、無産階級の解放と婦女の解放なくしては民主主義的国家を完成することができない」[15]という句から分かるように、女性解放運動も重要な話題となっていた。民族団体の女性幹部たちを中心とした女性解放運動は、家庭内暴力の解決を始め、脱植民地化への運動の一環として、朝鮮語の識字教育も展開されることになる[16]。

戦後の朝鮮語の識字教育は、在日本朝鮮人連盟(以下、「朝連」と略する)によって建設された朝鮮語講習所や朝鮮人学校を通じて開始し、女性への教育は「朝連」の婦女部が担当した。例えば、「朝連」東京本部の荒川婦女部では、識字教育とともに、「名簿作り」も行われた。「名簿作り」とは植民地支配によって失われた民族名を取り戻すことであり、「○○のオモニ(お母さん)」「○○の奥さん」

15
金恩順「婦女の解放と覚悟」、『解放新聞』1946年6月1日(朝鮮語)。李玲実「解放直後の在日朝鮮人女性運動の生成と女性活動家——「在日本朝鮮民主女性同盟」結成過程を中心に」、『日韓相互認識』8号、2018年、31頁から再引用。

16
「男性たちとともに進むために、また私たちの権利を得るために学ばなければならないだろう。よく知ることが、最も大きな力だと私は信じる」という句から分かるように、当時の女性幹部たちは女性の地位向上のための取り組むべき事項として教育を挙げていた(全永徳「新家庭生活建設——家庭から専制を追い出すこと」、宋恵媛編『在日朝鮮女性作品集 一九四五～八四 1』62頁。初出は、『女盟時報』2号、1948年2月1日、2面(朝鮮語)。

といった男性の従属物として呼ばれてきたことに抗する女性解放運動でもあった[17]。全哲の4コマ漫画「オモニ教育」(『朝鮮時報』165号、1961年6月17日)では、生活学校の教師が受講生の出欠を確認するシーンが描かれているが、「生まれてはじめて自分の名前を呼ばれ」て感動している女性の姿も描かれている[18]。識字教育を受けることで、自分の名前を取り戻した女性たちは多かったと推定される。

「朝連」の婦女部を継いで1947年10月12日に結成された在日本朝鮮民主女性同盟(以下、「女盟」と略する)は、各地方ごとに夜間講習会を開き、識字教育とともに、家庭生活の質をも高めるために、技術教育なども推し進めた。例えば、1947年11月に行われた「女盟」大阪本部の学習会では、およそ40人の女性たちが参加して女性問題や組織問題、世界情勢、生活改善、朝鮮語の学習を一週間かけて学習したという[19]。また、機関紙として『女盟時報』(全16号、1947.12.29–1949.7.25)も創刊することで、女性たちにも書く場を提供する役割も果たした[20]。

一方、「朝連」が1949年9月に団体等規制令第4条により強制解散させられると、朝鮮語の識字教育も一旦中止となる。そこで、「女盟」の幹部たちを始め、多くの同盟員たちは日本共産党へ加盟し、識字学校も建て直し、成人女性への朝鮮語教育、民族教育、啓蒙教育などを実施した[21]。

このように、早い時期から民族団体の識字教育は女性も対象として行われていたのだが、果たしてそれはいかに運営されていたのだろうか。また、日々の生活に追われつつ、女性たちはいったい何を考え、何を望んでいたのだろうか。以下に引用するのは、1950年代前半に東京都内で行われた識字教育の詳細が描かれており、また、日々の生活に追われながらも文字を学ぼうとする女性の強い意志も読み取れるものである。

> 題名:私たちはこのようにして文字を習った　金鐘惠・高京子
>
> 「おかあちゃんこの字なんとよむの?」私は、その声にはっとする。子どもが学校からかえってきて、母親に「この字ナーニ」と、きかれるたびに、私は、答えることのできない自分に、体のすくむような、とまどいとはずかしさにかられる。
>
> 自分が字をよみ、かくことができないだけに、夫にさえ、なにか、バカにされているようにおもわれ、また、なにもわからないのだというような、もののいい方をされる場合も現にある。そんなとき、妻である自分だけが、たったひとりぽっちでとりのこされてしまったような、いい知れぬさびしさをひしひしと感じる。なんとかしてでも、字をおぼえて、書いてみたい、といった反ぱつめいたものが、胸にわきあがってくる。(中略)
>
> あつまった五人の婦人たちは、二十九才から三十七、八才までの、子どもを二人から五人までかかえ、その日、その日をおくるのがやっとの人たちばかりであった。

17
李杏理「脱植民地と在日朝鮮人女性による攪乱――「解放」後の濁酒闘争からみるジェンダー」、『ジェンダー史学』13号、2017年、40頁参照。

18
全哲「オモニ教育」、宋恵媛編『在日朝鮮女性作品集 一九四五～八四1』、2頁。初出は、『朝鮮時報』165号、1961年6月17日(日本語)。

19
宋恵媛『「在日朝鮮人文学史」のために――声なき声のポリフォニー』、60頁参照。

20
『女盟時報』(1947–49)は、在日朝鮮人女性たちを対象とした月刊誌である。同誌には女性たちの記事やエッセイなども掲載されていたが、投稿者のほとんどは金恩順や全永徳といった、いわゆるエリートである「女盟」の幹部たちであった(前掲、60–61頁も参照)。

21
「次々と共産党に入党」『解放新聞』1949年9月25日、2面(朝鮮語);「朝日婦人の確固たる闘争体制を確立」『解放新聞』1949年11月15日、2面(朝鮮語);「女性運動をどのように展開していくか(一)女盟中央常任 金榮子」『解放新聞』1950年2月18日、2面(朝鮮語)参照。

学習会は、このような困難な事情のなかではじめられた。はじめに、私たちは、学習会をどのようにやっていくかを、みんなで相談した。そして、べんきょうは、毎週の火、木、土の三日間、時間は、午後八時から十時までの二時間にした。責任者もみんなのなかからえらばれた。誰でも学習会をやすむときには、責任者にわけを話して休むことにした。

なお、先生のことでもこまった。先生の生活が、私たちとおなじようにくるしいために、なかなか思うように授業にも出てこられなかった。しかし、私たちが、「ほんとうにべんきょうしようとすれば、ひとり何万円かかるかも知れない。みんなくるしいけれども、そのくるしいなかから、たとえ少しでもよいから出しあって、先生をたすけよう！」と、すぐに意見がまとまった。そこで、一人、月に二百円でづづつ出して交通費にしてもらい、学習日の夕食は、みんなで順番にしてあげよう。また、私たちの先生は、他の人はだれも心配してくれない、私たちの先生は私たちでまもるんだ、と、みんなせいいっぱいの気持であった。（中略）

「いったい、字をおぼえることだけでいいのかしら？私たちは、世間を知らない。世のなかがどうかわっていくのかも、ちっともわからない。それを知るようにすることが、ほんとのべんきょうではないかしら？」あるとき、このような意見がもちあがったことがある。しかし、その意見には、さしあたって、字をおぼえることだ、ということで、耳もかされなかった。しかし、だんだんと、べんきょうしていけばいくほど、わからないことがたくさん出てきた。（中略）

「私たちがこんなにこまるのは、どうしてだろう？」というようにして、「アメリカが苦しめているのだ！」「いや、李承晩だ！」「そうじゃない、日本の吉田だよ！」と、私たちの意見は、いろいろでてきた。

それについて、「私はこうおもう」「こう考えるんだけど……」と、それぞれ意見がそっちょくにだされ、みんなで、かんがえ、はなし合うようにした。どうしても、分らないことや、ハッキリしないとおもうことは、先生にききながら、ひとつひとつ、べんきょうしていった。（中略）

学習会のなかで、私たちはいろいろのことを知った。学習会は、実際の生活とむすびつけて、いろんなことをおしえてくれた。みんながなやんでいること、くるしんでいることを、みんなでとりあげ、それをどうするかということをはなしあい、わからないことやギモンにおもうことは、自分がわかるまで追求していくことが、いかに大切であるかを理解するようになった。（後略）[22]

下線と強調は論者による。

22
金鐘惠・高京子「私たちはこのようにして文字を習った」、宋惠媛編『在日朝鮮女性作品集 一九四五〜八四 1』、3–5頁。初出は、『新しい朝鮮』2号、1954年2月（日本語）。

大人数が参加する各地方本部の集いとは異なり、これは5人で行われたため、規模が小さい支部での識字教育と考えられる。この文章には、女性たちの読み書きへの欲望とともに、文字を獲得していく過程が詳細に描かれている。

金鐘惠・高京子の作文「私たちはこのようにして文字を習った」(『新しい朝鮮』2号、1954年2月、日本語)では、日々の生活に追われつつも、「字をおぼえて、書いてみたい」という意志で僅かな時間を捻りだして学習会に参加している女性たちの姿が描かれている。

しかし、教える講師の方も学ぶ女性たちと同様に、経済的に苦しんでいたため、「なかなか思うように授業」が進められなかった。そのため、女性たちは「私たちの先生は私たちでまもるんだ」という「せいいっぱいの気持」を持って「一人、月に二百円でづつ出し」たりするなど、自分たちも苦しい中、一人ひとりが互いに助け合いながら、知恵を絞ってその問題を打開していった。

また、「だんだんと、べんきょうしていけばいくほど、わからないこと」が増えつつも、「みんなで、かんがえ、はなし合う」ことで、「自分がわかるまで追求していくこと」の重要性に気づかされる女性の姿も描かれている。引用部分に見られるように、文字を覚えることは、自分の言葉で世界を対象化して眺めることを可能とするものである。それは世界に対して語るべき言葉を獲得し、自分の内面世界と向き合うことによって生まれるのである。そこでは、失われていた主体性が取り戻され、世界への応答としての言葉も生み出されるのである。

このように、金鐘惠・高京子の作文には、文字を覚えることによって、自分の中に秘められた感性を見つけ、それを他者と共有し、新たな視点に触れ、そうして生まれ変わるという、その一切が語られているといえる。

しかし、「文盲退治」と生活教育、封建的家父長制に対する批判を中心に展開されてきた女性たちの識字教育は、1955年の「総連」結成とともに新たな局面を迎えることになる。日本共産党と決別し、「共和国」との連帯強化を目標とした「総連」の方針により[23]、「女盟」も在日朝鮮人女性が「文盲」であることを、祖国に対する「恥」という個人の問題として捉え返し、識字教育の体制も再整備せざるを得なかった。作文の中には「私たちは異国暮らしをしているとはいえ、つねに共和国の女性として誇りを持って自分の民族性を守り、世界に恥じない共和国の公民らしく生き、子どもたちの民族教養をさらに高めねばならない」[24]という当時の思いを記したものもあり、これまでの民族解放という脱植民地化や、女性解放というジェンダー的観点が「共和国」を唯一の祖国とするナショナリズムの論理の後景に押しやられるようになる。

それでは、1955年の「総連」の結成とともに新局面を迎えた識字教育において、女性たちは何を学び、何を表現していたのか、あるいは表現せざるを得なかったのか。次の節では、それについて、女性たちが書き残した作文を手掛かりにして考察していきたい。

23
松浦正伸『北朝鮮帰国事業の政治学——在日朝鮮人大量帰国の要因を探る』明石書店、2022年、84–87頁。

24
尹スミ「もっと高尚な品性の持ち主に」、宋恵媛編『在日朝鮮女性作品集 一九四五〜八四1』、119頁。初出は、『朝鮮新報』1962年10月13日、4面(朝鮮語)。

3. 冷戦を生き抜いた女性たち

1955年に「総連」が結成されてから、「女盟」はよりその同盟員を対象に積極的な文芸作品募集を行い、機関紙『朝鮮新報』などを通して、女性たちにも書く場を提供した[25]。そこには、女性たちの読み書きへの欲望とともに、戦後の南北のイデオロギーも持ち込まれており、女性たちの日常生活にそのまま投影されている。例えば、次のような文章がある。

25
『朝鮮新報』の4面には、女性たちの文章が主に掲載されていたが、「女盟」の活動家や識字学校の講師のみならず、一般の女性読者からの投稿文も載せられていた。

題名：字を読めるようになった喜び　金サムスン

私は解放後から今日まで、女盟の桑野分会で仕事を手伝ってきました。しかし、字を知らないので仕事らしい仕事はできませんでした。ただ会費を集めたり、人々を動員したりするだけでした。（中略）

何年かぶりに女盟分会の総会に参加したところ、分会長の話もまともに理解できませんでした。これももどかしかったのですが、もっともどかしいことがありました。それは、ある日学校から帰ってきたうちの子に、分からない字を教えてとほしいと言われた時でした。どれだけ恥ずかしくじれったかったでしょうか。私は固く決心をしました。「絶対に文字を学ばなければならない」、このような固い決心が私の胸に湧き上がりました。

私は分会の成人学校に通いました。八か月間、一日も休まずこつこつと学びました。

そうして今では『朝鮮新報』も読めるようになり、世の中のことを自分の目で見ることができるようになりました。新聞を読んだら、他の分会のことや立派な分会長の話などをはじめ、総連・女盟の活動を実感として理解することができるようになりました。今では、誰がどんな質問を私にしてもびくともしません。目の前が明るくなってくるかのようです。（中略）

これもやはり、立派な自分の祖国があり、賢明な首領がいらっしゃるためだと思います。

もしもまだ、堂々たる私たちの祖国・共和国を持つことなく、日帝の鉄鎖から解放されていなかったら、文字どころか言葉すら知らなかったことでしょう。

このように考えると、南朝鮮を強制占領している米帝がよけいに憎くなります。

私は、過去の私のように文字を知らない女性たちに、今日の私の喜びと幸福を思う存分話そうと思います。

文字を習った後の私の状況は本当に変わりました。生活が限りなく楽しいのです。（下関市女盟桑野分会、四二才）[26]

翻訳は宋恵媛によるものであり、下線と強調は論者による。

26
金サムスン「字を読めるようになった喜び」、宋恵媛編『在日朝鮮女性作品集 一九四五～八四１』、11−12頁。初出は、『朝鮮新報』1962年11月30日、4面（朝鮮語）。

まず、金サムスンの作文「字を読めるようになった喜び」（『朝鮮新報』1962年11月30日、4面、朝鮮語）を読んでみると、様々な感情が混じり合っていることが

分かる。非識字者であるがゆえに「仕事らしい仕事はでき」なかったという悔しさと、それに伴う疎外感。母親として子供の質問に答えられなかったという恥ずかしさ。そして、「分会の成人学校に通い」文字を「一日も休まずこつこつと学」ぶことで、「生活が限りなく楽し」くなったということが、それに当てはまるだろう。

また、書き手の金サムスンに纏わりついている政治性つまり、組織と緊密に関わっていることから、文字を「どこで、誰から学ぶのかという問題」は、「女性たちの生き方、思想、帰属意識の方向性に決定的といえるほどの影響を」与えていることも確認できる[27]。

27
前掲、v頁。

このように、女性たちの置かれた特殊な状況から、文字を学ぶことは単に字を覚えることだけではなく、教える側（＝組織）の考え方（＝思想や理念）も内面化していくという、文字獲得の本質についても考察できるのではないか。その一例として、下関の成人学校で文字を学んだ、当時56歳の金ナミという女性が南北統一を願って詠った詩「統一を願って」（『朝鮮新報』1964年4月11日、4面、朝鮮語）を取り上げたい。

> 走る走る／統一列車が走る／／ここでも統一だ／あそこでも統一だ／／どの村でも統一だ／どの都市でも統一だ／／みんないっしょに／統一を叫ぶ／／**南北に向かって／走る統一列車は／私たち三千万同胞の／幸福を抱いて走る**／／統一列車が走る／米帝を追い出す列車が走る／／**米帝よ退け／朝鮮から早く出ていけ／米帝の背中の上には／雷が落ちる**[28]
>
> 筆者は下関の成人学校で学んだ当時五六歳の女性。一九〇八年頃生まれ。
> 翻訳は宋恵媛によるものであり、下線と強調は論者による。

28
金ナミ「統一を願って」、前掲、22頁。初出は、『朝鮮新報』1964年4月11日、4面（朝鮮語）。

金ナミの詩には、東アジアの熱い冷戦の痕跡がそのまま残っていることが分かる。金ナミは現在も南北分断が継続しているのは、「米帝（＝アメリカ帝国）」が韓国を強制占領しているためだと考えており、それゆえ「米帝よ退け」と訴えている。この詩には、朝鮮半島からのアメリカ軍の完全な撤去が祖国統一につながるという「総連」の思想が内面化してはいるものの、いずれ統一列車に乗って南への横断を希望している金ナミの切なる思いも確認できる。

一方で、この時期においても女性たちが文字を学ぶことは簡単なことではなかった。それは、識字学校への通学も男性の意思によって左右されていたからである。多くの女性たちは、識字学校に夫の同意なしでは通えなかったし、逆に夫に識字学校に行くことを反対されて通えなかった場合も多々あった。以下に引用する作文「成人学校卒業を前にして――上級班を卒業する喜び」（『朝鮮新報』1964年4月20日、4面、朝鮮語）には、夫の同意なしでは成人学校に通えない女性の姿が描かれている。

> 題名：成人学校卒業を前にして――上級班を卒業する喜び　李ジョンエ
> 私はこの四月に、成人学校上級班を修了する予定です。考えてみれば

短い期間でしたが、この成人学校を通じて、これまでの四〇年間の人生では経験できなかった様々なことを経験し、言葉や文字では表現しつくせないほどの生きがいを感じました。（中略）

しかし、今日にいたるまでは紆余曲折も多くありました。家庭の主婦として多くの家族を抱え、夫の世話をしながら学びに出かけることは、実際、並大抵のことではありませんでした。家のこともしっかりできないで字を学ぶとは何ごとだと夫に叱られないように、夫の知らないところでたくさん仕事をしなければならず、洗濯などが多いのに全くする時間がない時などは、目につかないように隠して学校に出かけたりもしました。夫が帰る一時間前に家を出ることがあっても、アボジが帰ってきたら、ついさっき出かけたと言うようにと子どもたちに言い含めて出かけたりしたこともありました。仕事の忙しい夫は、そんな私を好ましく思っていませんでした。私は夫のその心情も理解することができました。だからこそ私は、もっと家のことをきちんとし、もっと仕事もしようとしました。（中略）

私はこれまで、夫に甲斐性がないから私たち家族が苦労しているものとばかり考え、いらいらしたりもしました。子どもたちに対しても叱るだけでしたが、今では朝鮮の学生としてどのようにすべきか、という教育を行うようになりました。（中略）

本当に総連はありがたいです。私のような無知な者を、このように目覚めさせてくれるからです。

昔の言葉に、女性は父母と夫によく仕え、子どもをたくさん産みさえすればいいというものがあります。［しかし、］世の中のことを自分の目で見て、自分の教養をさらに高めることによってこそ、本当に賢い主婦に、妻に、母になることができるのだと私は考えます。

家庭の事情のせいで成人学校に出かける時間がないという女性たちがいますが、私の経験では、結局それは言い訳です。学ぼうという自分の覚悟を固めれば、必ず学べると私は思います。（総連東京板橋支部　北町分会受講生）[29]

翻訳は宋恵媛によるものであり、下線と強調は論者による。

ここで注目したいのは、書き手の李ジョンエが「賢い主婦に、妻に、母になること」を意識していることである。これは、同じ時期に書かれた作文や記事でもしばしば見られる内容ではあるが[30]、結論から言えば、夫を支えながら、祖国である「共和国」の発展を次世代に託するという課題から、母親としての役割が強調されたのではないかと思われる。

その背景には、「共和国」の指導者である金日成（1912–94）が、1961年の「全国母親大会」において行った、母親の責務は子供の教育であるという演説がある[31]。それ以降、「共和国」では子供の模範となるための徳目として、民族愛と愛国心を抱いて一生懸命に働く女性の姿が女性のあるべき姿と強調されていく

29
李ジョンエ「成人学校卒業を前にして――上級班を卒業する喜び」、前掲、19–21頁。初出は、『朝鮮新報』1964年4月20日、4面（朝鮮語）。

30
ほかに、全サンスン「朝鮮女性らしく母らしく――こつこつと学んだらこの程度書けるようになった」、『朝鮮民報』1957年11月30日、4面（朝鮮語）や、崔ハッス「知らないと愛国事業もできない――夜更かしの勉強で文字を覚えて「文盲」を退治した福岡県女盟海津支部の金月分という女性の話」、『朝鮮新報』1963年2月16日、2面（朝鮮語）などがある。

31
金日成「子供の教育における母親の任務――全国母親大会でおこなった演説（一九六一年十一月十六日）」、朝鮮労働党中央委員会編『金日成著作集15（1961年1月～1961年12月）』外国文出版社、1983年、317–326頁参照。

ことになるのだが、「総連」も金日成が提示した女性像をそのまま受け入れ、女性たちにそれを求めたのだった。それは、在日朝鮮人が日本社会から排除されればされるほど、南北に分かれたどちらかの祖国への帰属を希求し、その一員として誇りを持って祖国の発展に寄与すべく、その女性像にこだわったのだと考えられる。

また、1959年から行われていた朝鮮民主主義人民への「帰国運動」[32]とも深く関わっていると考えられる。

> 題名：文盲から脱した喜び　金ジョンスン
>
> 成人学校で朝鮮語（ウリマル）と朝鮮文字（ウリクル）を学んで文盲から脱した喜びを抑えきれず、ここに何言か書き記します。
>
> 私たちの分会でも、帰国運動が始まった後から成人学校が始まりました。その時、私のところにも総連支部と分会の活動家たちが何度も訪ねてきて、成人学校に出るよう勧誘しました。しかし私は、「五〇にもなって勉強をして何になるんだか」と言って、出ませんでした。（中略）
>
> 学んでみるとだんだん面白くなり、一生懸命勉強するようになりました。そうして、全く文字を知らなかった私が今日、初めて自分の手でウリクルを書けるようになったので、考えただけでも胸がいっぱいです。祖国と敬愛する首領の大きな（マ）大きな（マ）配慮に対する限りない感謝と、共和国公民となった誇りと栄誉を、より胸深くに感じます。（中略）
>
> 過去に敵たちにウリクルを奪われ、辛酸をなめさせられたことを思うとき、今日私に文字を教え、朝鮮女性らしく生きていけるようにして下さった祖国と敬愛する首領、金日成元帥に限りなく感謝します。無知な私を目覚めさせ、蒙を開いてくれた総連は、本当にありがたい組織です。私はこれからさらに熱心に勉強して来年には講師になり、うちの分会から文盲が一人もいなくなるまで、ずっと成人学校の活動を一生懸命行っていくことを、固く決意します。（総連神奈川県川崎支部　群電前成人学校受講生）[33]
>
> 翻訳は宋恵媛によるものであり、下線と強調は論者による。

これは、神奈川県の成人学校で識字教育を受けた、金ジョンスンの作文「文盲から脱した喜び」（『朝鮮新報』1965年4月29日、4面、朝鮮語）である。作文の冒頭部を読むと、「帰国運動」の時期とも重なって朝鮮語の識字教育がより活発になったことが推測される。女性たちに民族愛と愛国心を抱いた真の「朝鮮女性」という意識を芽生えさせることで、子供の民族教育に力を入れる母親の役割を強調し、祖国である「共和国」の発展に寄与できる次世代の育成を期待していたと考えられる。

最後に、ここで検討したいのは、改めて指導者の金日成や「総連」への忠誠を誓っていることをいかに受け止めればいいのかについてである。もちろん、植民地支配に起因する民族差別と家庭内のジェンダー差別を受けていた在日朝鮮人女性たちにとって、文字を学ばせてくれた民族団体と、それを支える祖国

32
「帰国運動」とは、主に日朝赤十字社の主導により、1959年12月から1984年7月まで集団的に行われた朝鮮民主主義人民共和国への帰国のことである。約25年の間に、多くの在日朝鮮人とその家族（日本人配偶者やその子女などを含む）が「共和国」に永住帰国し、その数は約9万3千人を達する。これほどまでに多くの在日朝鮮人が祖国の「共和国」へと「帰国」した背景には、日本社会の根強い民族差別と、それに伴う貧困の問題があった。また、当時の日本では「共和国」は「地上の楽園」であるというプロパガンダが広く流布されており、日本のメディアも肯定的に報道することで、その信ぴょう性を後押しする役割を果たした（尹建次『「在日」の精神史2――三つの国家のはざまで』岩波書店、2015年、105–119；松浦正伸『北朝鮮帰国事業の政治学――在日朝鮮人大量帰国の要因を探る』、12–25頁参照）。

33
金ジョンスン「文盲から脱した喜び」、宋恵媛編『在日朝鮮女性作品集 一九四五～八四 1』、16–17頁。初出は、『朝鮮新報』1965年4月29日、4面（朝鮮語）。

の指導者への感謝の気持ちはあったと考えられる。それと同時に、女性たちも教育を受けるにつれて無意識に組織の思想を内面化し、自分の作文を投稿する際に、読まれることを意識したのではないかと思われる。本稿で取り上げた作文は、「総連」系の在日朝鮮人たちを主な対象読者としている『朝鮮新報』などの機関紙に掲載されたものである。

ここで考察すべきことは、新聞は「読者共同体」を形成する役割を果たしていることである。飯田祐子（2016）が指摘しているように、「書くこと」は読まれることに晒されるものである。つまり、書き手は不特定多数の読者に読まれることを意識しつつ、それに応答する形式でしか書けないということである。「書くこと」はある意味、書き手と読み手との交渉過程によって決定されるものであり、可変的で流動的にならざるを得ないものともいえる[34]。それゆえ、指導者の金日成や組織への感謝の気持ちを表現することは、ある種の決まり文句だったのかもしれない。とはいえ、読み書き能力を獲得したという喜びも入り混じっており、簡単に結論を出すのは軽率なこととも思われるため、今後、宋恵媛編『在日朝鮮女性作品集 一九四五～八四 1・2』（緑陰書房、2014）に収録されていない他の作文をも発掘し、それらを分析することで、さらなる考察が必要となってくるだろう。

34
飯田祐子『彼女たちの文学――語りにくさと読まれること』名古屋大学出版会、2016年、1–19頁。

4. おわりに

以上、本稿では、戦後の在日朝鮮人女性たちの識字教育に注目し、彼女たちが書き残した作文を手掛かりに、その「書くこと」の意味を考察しつつ、彼女たちを取り巻く世界や社会について検討してきた。

彼女たちの作文は、三つの国の狭間で沈黙せざるを得なかったことへの抗いであると同時に、彼女たちの存在が忘れ去られつつある今日において、その存在を証明するものとしても読み取れるだろう。これまで、「異国で苦労しながらも逞しくひたむきに生きた女性たち」[35]と一義的に定義づけられていた彼女たちが自らの言葉で世界に自分の存在を表すことで、自分の境遇に対する理解が深まり、自己も再構築されていくことになる。

また、彼女たちの作文は、当時の女性たちの経験とも重なり合う。東アジアの熱い冷戦を背景に、在日朝鮮人社会を二分化した南北の葛藤。そして、本稿で取り上げた女性たちが「総連」系の組織から文字を学んだことから、文字獲得とともに教える側の考え方をも内面化していったという、そのプロセスについても確認することができた。

しかし、残された課題もある。本稿では、宋恵媛がまとめた『在日朝鮮女性作品集 一九四五～八四1・2』を分析対象としたが、朝鮮語の識字教育と関連する作文のほとんどが1960年代に書かれたものであるため、時代的に偏っている問題点がある。それゆえ、1940年代と50年代の識字教育に関する資料調査

35
同注12。

も行う必要があり、さらなる分析と考察が必要となってくるだろう。

また、これまで見てきたように、1960年代に入ると、朝鮮語の識字教育は「共和国」の海外公民としての教養、社会主義を肯定するための手段として使われるようになる。祖国との連帯強化を目標とした「総連」の方針により、個人の内面世界や個性を表現する機会が制限される構造的な問題が生じ[36]、女性たちの居場所も段々となくなり、朝鮮語の識字教育は衰退期を迎えることになる。その代わりに、1960年代後半から女性たちは夜間中学で日本語を学び始め、1970年代になると女性たちがクラスの半分以上を占めた[37]。一世の女性たちの日本語の作文も1970年代から見え始めるのだが、朝鮮語の作文とは異なり、日本語でなら自由に表現できたのだろうか。創作言語によって作文の内容がどのように異なっているかについても、併せて考える必要があるだろう。さらに、言語の問題も含め、創作時期によってその内容がどのように異なっているのかをも体系的に分析する必要があり、それらは今後の課題としたい。

36
その一例として、『チンダレ』論争（1955–58）がある。『チンダレ』（1953–58、全20号）は、詩人の金時鐘（1929– ）を中心とした詩誌である。『チンダレ』に参加していた多くの在日朝鮮人は、1930年代に日本で生まれた2世であったため、彼らの創作言語は日本語であった。しかし、祖国との連帯強化を目指した「総連」の結成に伴い、その文化運動においても「朝鮮人は朝鮮語で祖国を歌うべきである」と規定されることになる。それにより、『チンダレ』は「民族的主体性を喪失している、民族虚無主義に陥っている」といった猛烈な批判を浴び、20号をもってその幕を閉じることになる（宇野田尚哉「報告1 東アジア現代史のなかの『チンダレ』『カリオン』（2009年5月24日）」、チンダレ研究会編『「在日」と50年代文化運動——幻の詩誌『チンダレ』『カリオン』を読む』人文書院、2010年、26–28頁参照）。

37
山根実紀著・山根実紀論文集編集委員会編『オモニがうたう竹田の子守唄——在日朝鮮人女性の学びとポスト植民地問題』、54–65頁参照。

附記

本稿は、「国際韓人文学会・韓国文学翻訳院」共催の韓国国内シンポジウム「ディアスポラ・ハングル文学と人文地理」（2022年7月29日）にて発表した内容を大幅に見直したものである。発表のコメンテーターをご担当いただいた崔賢植先生から、有益なコメントをいただいた。また、資料の収集にあたっては、「朝鮮大学校 図書館」（東京都小平市小川町1-700）の司書である李有実氏、在日本朝鮮留学生同盟東海地方本部の副委員長である全裕誠氏ほか、多くの方からご助力をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

参考資料

1）テキスト

金鐘惠・高京子「私たちはこのようにして文字を習った」、宋恵媛編『在日朝鮮女性作品集 一九四五～八四１』緑陰書房、2014年、3–6頁。初出は、『新しい朝鮮』2号、1954年2月（日本語）。

金サムスン「字を読めるようになった喜び」、宋恵媛編『在日朝鮮女性作品集 一九四五～八四１』緑陰書房、2014年、11–12頁。初出は、『朝鮮新報』1962年11月30日、4面（朝鮮語）。

金ジョンスン「文盲から脱した喜び」、宋恵媛編『在日朝鮮女性作品集 一九四五～八四 1』緑陰書房、2014年、16–17頁。初出は、『朝鮮新報』1965年4月29日、4面（朝鮮語）。

金ナミ「統一を願って」、宋恵媛編『在日朝鮮女性作品集 一九四五～八四 1』緑陰書房、2014年、22頁。初出は、『朝鮮新報』1964年4月11日、4面（朝鮮語）。

文オクチェ「明るく澄んだ世界は夢のような世界」、宋恵媛編『在日朝鮮女性作品集 一九四五～八四１』緑陰書房、2014年、14頁。初出は、『朝鮮新報』1964年12月5日、4面（朝鮮語）。

李ジョンエ「成人学校卒業を前にして——上級班を卒業する喜び」、宋恵媛編『在日朝鮮女性作品集 一九四五～八四１』緑陰書房、2014年、19–21頁。初出は、『朝鮮新報』1964年4月20日、4面（朝鮮語）。

2）文献

飯田祐子『彼女たちの文学――語りにくさと読まれること』名古屋大学出版会、2016年。

金壎我『在日朝鮮人女性文学論』作品社、2004年。

徐阿貴『在日朝鮮人女性による「下位の対抗的な公共圏」の形成――大阪の夜間中学を核とした運動』御茶の水書房、2012年。

宋恵媛『「在日朝鮮人文学史」のために――声なき声のポリフォニー』岩波書店、2014年。

宋恵媛編『在日朝鮮女性作品集 一九四五～八四 1』緑蔭書房、2014年。

松浦正伸『北朝鮮帰国事業の政治学――在日朝鮮人大量帰国の要因を探る』明石書店、2022年。

山根実紀著・山根実紀論文集編集委員会編『オモニがうたう竹田の子守唄――在日朝鮮人女性の学びとポスト植民地問題』インパクト出版会、2017年。

尹健次『「在日」の精神史2――三つの国家のはざまで』岩波書店、2015年。

李洪章『在日朝鮮人という民族経験――個人に立脚した共同性の再考へ』生活書院、2016年。

3）論文、雑誌

磯貝治良「〈在日〉文学の女性作家・詩歌人」、『架橋』26号、2006年、47–69頁。

磯貝治良「〈在日〉文学の二〇一五、そしてゆくえ――宋恵媛『「在日朝鮮人文学史」のために』にふれて」、『抗路』1号、2015年、134–144頁。

李京珪「戦後日本の新聞雑誌メディアの在日朝鮮人関連資料」、『跨境：日本語文学研究』6号、2018年、219–225頁。

宇野田尚哉「報告1 東アジア現代史のなかの『ヂンダレ』『カリオン』（2009年5月24日）」、ヂンダレ研究会編『「在日」と50年代文化運動――幻の詩誌『ヂンダレ』『カリオン』を読む』人文書院、2010年、16–31頁。

金日成「子供の教育における母親の任務――全国母親大会でおこなった演説（一九六一年十一月十六日）」、朝鮮労働党中央委員会編『金日成著作集15（1961年1月～1961年12月）』外国文出版社、1983年、305–331頁。

宋連玉「在日朝鮮人女性とは誰か」、岩崎稔・大川正彦・中野敏男・李孝徳編『継続する植民地主義――ジェンダー/民族/人種/階級』青弓社、2005年、260–275頁。

李杏理「脱植民地と在日朝鮮人女性による攪乱――「解放」後の濁酒闘争からみるジェンダー」、『ジェンダー史学』13号、2017年、37–53頁。

李玲実「解放直後の在日朝鮮人女性運動の生成と女性活動家――「在日本朝鮮民主女性同盟」結成過程を中心に」、『日韓相互認識』8号、2018年、31–54頁。

4）記事

尹スミ「もっと高尚な品性の持ち主に」宋恵媛編『在日朝鮮女性作品集 一九四五～八四 1』緑陰書房、2014年、119–120頁。初出は、『朝鮮新報』1962年10月13日、4面（朝鮮語）。

全永徳「新家庭生活建設――家庭から専制を追い出すこと」、宋恵媛編『在日朝鮮女性作品集 一九四五～八四 1』緑陰書房、2014年、62頁。初出は、『女盟時報』2号、1948年2月1日、2面（朝鮮語）。

全サンスン「朝鮮女性らしく母らしく――こつこつと学んだらこの程度書けるようになった」、宋恵媛編『在日朝鮮女性作品集 一九四五～八四 1』緑陰書房、2014年、8–9頁。初出は、『朝鮮民報』1957年11月30日、4面（朝鮮語）。

全哲「オモニ教育」、宋恵媛編『在日朝鮮女性作品集 一九四五～八四 1』緑陰書房、2014年、2頁。初出は、『朝鮮時報』165号、1961年6月17日（日本語）。

崔ハッス「知らないと愛国事業もできない――夜更かしの勉強で文字を覚えて「文盲」を退治した福岡県女盟海津支部の金月分という女性の話」、『朝鮮新報』1963年2月16日、2面（朝鮮語）。

記者未詳「次々と共産党に入党」『解放新聞』1949年9月25日、2面（朝鮮語）。

記者未詳「朝日婦人の確固たる闘争体制を確立」『解放新聞』1949年11月15日、2面（朝鮮語）。

金榮子「女性運動をどのように展開していくか（一）女盟中央常任 金榮子」『解放新聞』1950年2月18日、2面（朝鮮語）。